

変化する若者の就業意識と大学教育とのギャップは？

対談

「若年就業者のウェルビーイングと学びに関する定量調査」の調査・分析に携わった立教大学経営学部の中原淳教授とパーソル総合研究所の小林祐児氏に、大学の教育現場の視点、企業の人事戦略からの視点を交えながら、これからの大学教育のあり方について議論してもらった。

ソーシャル・ラーニングの
実践のためには
大学の社会化が必要でしょう。



小林 祐児
パーソル総合研究所
上席主任研究員
こばやしゆうじ ● 上智大学大学院総合人間科学研究科社会学専攻博士前期課程修了。世論調査機関、総合マーケティングリサーチファームを経て現職。主な研究領域は理論社会学、情報社会学、アルバイト・パート領域のマネジメント、長時間労働問題など。

揺れ動くようになった若者のキャリア観

— 近年、若者のキャリア意識にどのような変化を感じますか。
小林 ワーク・ライフ・バランスに対する意識が最も変わったと思います。働き方改革が目される中で、人生の全てを仕事に捧げるという意識が希薄になりました。また、転職への意識も変わりました。転職者が急激に増えたわけではなく、転換しようというチケットを常に懐に持っているようです。
中原 私が普段、大学で学生たちを見てみると「学年が上がるにつれて気持ち揺れ動いている」という印象を受けます。入学時は「いい会社に就職できれば、それなり

に幸せになれるだろう」と思っていた学生も、2年生あたりから「どうもそうでもないらしい」と不安になってくる。大企業信仰は相変わらず根強いのですが、入社できずからといって、必ずしも幸せな場所にとどり着けるとは信じていない。常に転職という選択肢を持っているのも、そういう意識が働いているからだと思っています。

小林 今回の調査で幸せに活躍している7つのタイプの共通項として浮かび上がってきたのが、「ソーシャル・ラーニングの特性を持っていること」でした。つまり「人を介した学びができる人のほうが、活躍度、幸せ度が高い」という結果が見えてきたわけです。一方で、最近の大学生は、同性の友人や限られた仲間だけでグループ

をつくる傾向が強いように感じます。日本人は全般的に、友達や同僚など内輪の人間は信頼しますが、輪の外側にいる人と積極的にコミュニケーションを取ろうとしない。ソーシャル・ラーニングの観点からは内向き志向はよくないと感じますが、いかがですか。

中原 基本的に大学は同質性が高い場所です。同じ年齢で、同程度の学力、似た志向を持った人たちが集まっていますから。私はそもそも、社会に有為な人材を育てるためには、大学だけでは不可能だと思っています。外部の手を借りることも必要です。今、私の学部では、企業の協力を得てビジネスプロセスを体験する授業が多いのですが、学生は企業人からの「課題設定が甘い」「このロジック

に矛盾がある」などの指摘に、「新しい視点が持てました」と感心するのです。実は私も同じことを日ごろから指摘しているのに(笑)。

このように、いつも接している教員よりも学外の人からのフィードバックのほうが、学生が素直に受け止め、成長につながることも多い。学生を「社会人化」すること、つまり、考え方や立場が異なる社会人と一緒に学ぶ環境をつくることがすごく大事だと思います。最近では、大学教育に学びの「個別最適化」が求められています。これは、個人に必要な学びをできるだけ効率的に提供しなさいというところ。それも大切ですが、「他者と共にある学び」を捨ててしまうと、バランスが悪くなってしまう。両方をうまく機能させるやり

方を考えなくてはなりません。

学生も大学も社会と共に学ぶ

— そのほかに気づいた変化は？
中原 ゼミでビジネスモデルの研究をすると、学生は利潤追求だけを目的とした企業を極端に嫌がります。逆に、「ビジネスを通して社会を変革しよう」という理念を持つ企業にすごく共鳴します。**小林** 社会に生かされている感覚を保ちつつ、社会を変えられると思う人、つまり「ソーシャルエンゲージメント」が高い人は、社会で活躍し、ウェルビーイングも高いという結果が今回出ています。彼らは目の前の仕事を社会課題まで深く掘り下げて捉え、仕事に取

り組む傾向にある。先程、学生の社会人化の話が出ましたが、大学の「社会化」も同じくらい大切だと思います。大学の先生は、深い専門知識があり、統計や分析の手法も洗練されている一方で、大学の中だけで教育や研究をしていると、社会や企業が抱える現実の課題を理解されていない方も少なくありません。特にビジネスの世界は変化が速いので、常に関わりを持つたないと隔たりが大きくなる一方ではないでしょうか。

中原 最近では大学の内部からも「社会との接続が大切」という言葉が聞かれます。後は教育・研究で企業と連携する実践者をいかに増やすか、です。学生だけでなく、大学も、自分1人で抱え込まず、自信を持って自己開示し、社会と

共に課題を解決し、社会に有為な人材を育てていきませんか。

— 大学関係者へメッセージを。
小林 私は、「社会人」という言葉や、「(大学で学び) 巣立っていく」という表現はやめたらどうかと思っています。大学も学生も、「社会」の構成員なのです。一方、大学ならではの存在価値は、何でも自由に挑戦でき、失敗もできるプラットフォームであることだと捉えています。学生の行動を何でもコントロールしようとしないほうが、各学生の挑戦を促せるのではないのでしょうか。

中原 この20年、大学は、一方向的な講義型の授業から課題解決型やプロジェクト型に転換するよう求められてきました。今もそれに苦勞して取り組んでいる方もいるでしょうし、うまくいかず自信を失っている方もいるかもしれません。しかし、今回の調査で、人と共に学ぶことの効果、重要性が浮き彫りになりました。だから自信を持って実践し続けてほしいと思います。これから取り組む場合は、まず教員は自分の授業を変えてみる。特区のような形でやってみて仲間を増やすのもお勧めです。そして執行部の皆さんには、現場から提案された教育改革の提案をぜひ応援してもらいたいですね。

大学だけで社会に有為な人材を育てることは不可能だと思っています。



中原 淳
立教大学 経営学部 教授

なかはらじゅん ● 1998年東京大学教育学部卒業。2001年大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程中途退学。メディア教育開発センター(現・放送大学)、米マサチューセッツ工科大学客員研究員、東京大学講師・准教授などを経て、2018年より現職。博士(人間科学)。企業・組織における人材開発・組織開発を研究している。

対談の全貌は、Between情報サイト上の電子ブックで閲覧可能です。(between.shinken-ad.co.jp/between/2022/03/20223-4.html/)